

感情 という不可解なもの

高橋和巳『悲の器』論

東口昌央

はじめに

高橋和巳が文壇に登場したのは、「悲の器」が「文藝賞」長編部門に入選し、『文藝』一九六二年九月号にその一部が掲載されたことに始まる。¹高橋和巳の名はそれ以前にも、吉川幸次郎門下の中国文学研究者として、また埴谷雄高論である「逸脱の論理」²によってその名が知られていた。そして、この「悲の器」が、戦後文学を代表する埴谷雄高、福田恆存、野間宏、中村真一郎、寺田透、といった作家・評論家によって、不十分な部分を指摘されながらも、大きな期待をかけられて入選を果たし、小説家として世に知られることとなった。³『捨子物語』⁴を自費出版して小説家を目指しながらも、注目されることがなかった高橋和巳にとって、この「悲の器」の入選は宿願叶う出来事であった。

これまで、『悲の器』は、正木典膳が大学教授という職制上、知識人として位置づけられ、発表当初から知識人の問題が注目され、「知識人の破滅の物語」という構図を重視するものや、⁵正木典膳が感情を軽視したことで、知識人としての公共性・機能の剥奪により自己存在の価値を認識できず、破滅への道を歩んでいったとされてきた。⁶そして、これまでの先行研究において、言及されることは多かったものの、感情や他者の問題はこの作品を読む上での中心軸となつてはいなかった。

しかし、この作品が、正木典膳の手記（全三三章中、第三一章のみ妻・

静枝の手記）として描かれており、典膳の感情が直接的に吐露されつづけている事を考えれば、他者との関わりの中で生滅する感情の問題をこそ重視すべきである。

高橋は「夏目漱石における近代」において、漱石の『文学論』をとりあげ、次のように述べていた。「文学は認識的要素と情緒的要素との様々な型での統一体であるという、包括的な原理をたて」た漱石が、「情緒は文学の試金石にして、始にして終なりとなす」ということから、「認識よりも感情」に「考察の比重」はある。そして、「文学の感動とは何かという根本的な問から発した」漱石の考察が、「観念的な理想主義美学の私たちはとらず、経験主義的な感情分析といつかたちをとつた」としている。⁷この『文学論』の考察から、小説において人間を総体的に捉える際に、和巳が「感情」を重視していたことが窺える。だからこそ、「往生要集」からとられた『悲の器』という作品名に示されるように、「悲」という言葉、そこから見出される正木典膳の感情の基調としての悲しみ について考えるべきである。

そもそも感情は、「身体性あるいは身体的体験に近いもの」というように、身体によって規制される。しかし、それがすぐさま感情としてのまとまりを形成するわけではない。中村雄二郎は「移ろいやすいのはそのときそのときの情動であり、またそれが激化し、やや持続化した情念であつて、それらの彼方あるいは背後に、まとまりを持った固有の意味

での感情がある」と、身体から生じた情動・情念が、「感情において全体的なまとまり」をもつと指摘している。^{*10}

このように 身体 に生じたものの統合としての感情である 悲しみ が『悲の器』に表出されている。行為主体としての正木典膳を理解するためには、その思想以上に感情についても考察する必要があるはずだ。^{*11}

一 社会的自我のために

刑法学における「専門的作業がいかに私の存在の絶対性を獲得すべき道はない」と断言する正木典膳が、知識人としての矜持を強く持ち、ここにしか「絶対性」を見出し得ないことは大きな問題とされてきた。^{*12}しかし、それ以上に、刑法学者としての自己が、自己の全体を仮に象徴できたとしても、自己そのものになりえないことに典膳自身が自覚的でないことを問題視すべきである。

G・H・ミードが、「われわれ自身の態度のなかにあつてある反応を要求しているハッキリと組織化された共同体の表象」である「me」と、「他者の態度にたいする生物体の反応」としての「I」によつて、自己が構成されていることを示している。^{*13}この社会から認知される「me」の一つである「刑法学者」のみで、典膳の総ての社会的自我を網羅し、典膳の自我そのものは体现できない。しかし、典膳は「刑法学者」という「me」以外にアイデンティティを保持できていない。

例えば、「me」の一つである父親の役割を、「小さい息子と娘が一緒に裸になって風呂に侵入してきたとき」に求められながら、「まごわし」く感じた典膳は体を洗つてやることもなかった。父親という「me」として名指されながら、「I」は不十分な「反応」を示すのである。そして、

一緒に風呂にはいるという「日常茶飯事すらが」、「とりかえしのつかない一回性をもっている」ことに、典膳は息子や娘が社会人として成長するまで気づけなかったとしている。「専門の領域を離れば、たった一つの返答」にも困難を覚える典膳は、「刑法学者」としての機能を求められない場面において、「無駄なこと、愚かなことはすまいと警戒しすぎて、何もせず、日常生活における「一回性」に気づけなかったのである。そして、「人の意識は他者には見えない」ゆえに、「他者の考えるべきことを先取して遠慮」すべきでなかったにもかかわらず、「相手にとつて有難迷惑」である可能性に対する恐れのために、「行為する側」を選ばなかったのである。したがって、「行為する側」になり得たのが「刑法学者」という「me」だけであつたために、それを充実させるために全存在を賭けざるを得なかったのである。

さらに、典膳の回想を追つても、「刑法学者」となる以前にも、「me」に固執する姿が描かれている。「父の死後、意外に貧弱だった資産をまもつて、兄弟すべてが自立するまで」、学費を「すべて、私の給料とやつぎばやに書かれた原稿の謝礼でまかな」った典膳は、弟たちの学費を稼ぐことも一つの目的として、研究に打ち込んでいた。しかもそれは、戦中という「沈黙することがもつとも賢明であつた」「危険な」時代のことであり、典膳の「神経は、その時期になかばすりへり、繊細さを失つた」とされる苦痛に満ちたものであつた。ここから理解できるのは、典膳が長兄として、あるいは家督相続者という「me」としての機能を十全に果たそうと努めていたことである。「弟たちの学資にもこと欠いた漢方医の長男には、知識がいかに身を守る手段はなかつた」からこそ、「困苦勉勵を正しい行為だと思いつづけ」、学者として成功するしかなくたのである。それは、学費という現実的な必要のみならず、「知らんと欲するのが人のさがであり、知識への愛がもつとも高い人の愛である」

という信念にも支えられていた。

しかし、このような「me」のあり方によって、学問に「困苦勉強」した結果、青年期に「当然獲ていてよいはずの栄冠を、その手続きをしらなかつたというだけの手落ちで、取り逃がしていたようなくやしさをおぼえ、「ひそかに、小さな手によって打たれる拍手」がもたらされなかつたことに対する寂しさを、初老となった現在時に述べるのである。それは、栗谷清子との交流がもたらした思いであるが、典膳が若かりし頃に、人間としてあるべき情動の働きを抑圧し、自らに課せられた義務と学問上における研鑽にのみ意識を向け続けていた結果であった。

このような「me」への固執は、本文中では自らに課せられた「公的価値」の絶対視として、司祭である弟・規典との対話の中でも展開されている。その中で「愛とは何か」「知らない」が、「それは個別者の論理であつて、より高次の論理の基準ではない」と断じ、普遍的な論理への執着を語っている。これを規典は、典膳が「法と知識の名において神になろうと」し、「無限の愛の分配者そのものになろうと」していたことを批判する。この対話は、「刑法学の専門家」としての「me」にたち、「専門的作業がいかに私の存在の絶対性を獲得すべき道はない」という自己を絶対化する志向性と響きあつたものであり、「刑法学者」としての「me」が典膳の自己認識にとって強大なものであつたことを示す。だからこそ、典膳は「自分の言葉」を論理的なものへと訓練した結果、「言葉や身ぶり」が、「生活の中では、まず情感の表白であり、欲求伝達のための手段」であり、「非論理的」な「情動言語」だという息子・茂の見解を、典膳は理解できないのである。そして、「スノビズム」として蔑む茂の言葉に「圧倒されて」しまつたのである。

総ての言表を真に論理的に為すと同時に、他者の言表を総て論理的に処理していかうとする典膳には、それが不可能な行為であるという自覚

は乏しかっただろう。そして、自らが論理的に語りえない内容は語らず、それを他者にも強要していく姿勢には、米山みきのいうように人間関係を、命令する者と命令される者の間に引き裂いていくものであつただろう。だからこそ、世間慣れた、世知を感じさせる茂の言葉を「スノビズム」として断じざるを得ない典膳は、茂の大衆の一員という自己同定を難じて、大衆から超脱していかうとする志向を持ちつつげざるをえないのである。それは、「情動言語」の軽視とつながるものであり、翻ればこのような「情動言語」を発せざるを得ない女性たちの感情を軽視することを必然とするのであつた。

二 満たされぬ感情

『悲の器』において指摘されてきたことの一つに、正木典膳による、あるいは作者高橋和巳自身の女性差別的な発想があげられる。

正木典膳の女性との関わりに対して覚える違和感の第一は、病床に伏している寝たきりの妻・静枝に毎土曜日に性交渉を求めることである。このルーティン化された性交は、まるで定期的な欲望の処理とも読めるが、衝動性も加味されうる性欲をもルーティン化し、米山みきとの関係を持つまでは妻以外と性交渉をもたなかつた正木典膳をどのようにとらえるべきなのだろうか。自らの倫理観に則つただけだとしても、妻の処女性について言及されることを考えると、彼にとって妻以外の女性との交わりは考えられなかつたのではないだろうか。

そこで、まず妻の処女性に関する言及について考察しておきたい。伊藤藤益は、正木典膳が「自己の生を成り立たせる基本要素のなかから、情緒性をあくまでも排除しようとし」、「実証的な論理の内部に自己の全てを没入させた」ために、妻が処女ではなかつたことを「大したことは

ない」というのは、「処女性への肉体的接触を契機として男性の側の情緒が大きくゆさぶられる」ことがなかったからだと指摘している。寺田透が「処女願望」¹⁶を指摘しているのは対照的に、処女性を重視しない伊藤は、「論理性の次元で破綻をきたし破滅に至る」のは、「不必要な感情は理性の浪費」と断じた典膳の「理性主義」と、病床に伏していた妻への定期的な性交渉の要求という身体的欲求に従順な「自然主義」の共存が、米山みきや栗谷清子との関わりの中で平衡を失ったからだとしている。¹⁷しかし、もう一度、妻が「処女」ではなかったことがどのような文脈のなかで書かれているのかを見ておくべきであろう。

「先生は何もご存知ありませんもの。」

「何もとは失礼な。」私は煙草をとってもらってそれに火をつけた。

私の實力は、恩師宮地経世博士の特別な推挙が無くとも、早晚、私が現在到達している地位を当然獲得すべきものだった。劣者や敗者が、私の幾分はやかたった成功を、恩師の姪と結婚したことに帰して、誹謗し嫉妬する事実のあることを知らぬわけではなかった。しかし、ある幸福を与えられたとき、その幸運を生かしているか否かは、いつにその人間の實力と努力にかかっている。僥倖の訪れるや否やは、天の命であって私の知るかぎりではないのだから。私は助手から助教授、そしていったん実地に裁判にたずさわり、ふたたび教授に復帰した。その経歴に関して、私は自信をもっている。私の配偶者が誰であろうと、私はそうなただらう。結婚したとき、妻はすでに処女ではなかったが、そんなことは大したことではないし、いまもちろん大したこととは思ってはいない。だが、そのとき、なぜか不意に奇怪な幻覚の世界に私はおちたようだった。私はとりかえしのつかない、奇妙な錯覚をしてきたように思った。

「奥様をお愛しになつていらつしやいませんかのね、先生は。」

「なにを言う。」

「奥様のことをなにもご存知ありませんのね。」

米山みきが、典膳は妻に関して「なにも」知らないと言根拠は不明である。しかし、恩師によって結びあわされた夫婦の関係が、正木典膳の現在の地位との相関のなかで語られ、唐突に妻が結婚したときに「すでに処女ではなかった」という事実が記述され、それが「大したことではない」という断定に連なっていく。しかし、それが、「不意に奇怪な幻覚の世界」とつながることで、「大したことではない」はずのものが否定され、前後の「なにもご存知」ないのだという米山みきの指摘と呼応し、妻が「処女ではなかった」事実が典膳にとって大きな意味をもつと同時に、典膳が現在の地位を確立する中で、妻という女性に満たされないものを感じていたことが考えられる。また、この問答のあとに、典膳は米山みきに「肉体を要求」しており、女性に満たされるための回路が「肉体」しか用意されていないことが暗示されている。

妻が「処女」ではなかったことへの拘りは、「生涯にただ一つの、誰か一人に捧げるべき処女性」¹⁸が典膳には「捧げ」られなかったことに関わるだろう。言い換えれば、典膳にとって妻が自分との交渉をもつ以前に、誰か他の男性と関係を持っていたことに拘っていたのである。（他の男性とは、可能性としては典膳と同門の富田が荻野といった男性があげられるが、彼らと典膳の関係については後述したい。）そして、その拘りには三枝和子が漱石作品の分析で示していた、「何某と自分とが秤にかけられて、自分の方が負ける怖れがあるのが嫌さ」¹⁹も結びついているだろう。まさに、「夫は妻を財産として所有する。だから他人の冒すことを許さない」²⁰のであれば、すでに少なくとも一度は他の男性のもの、だったことよって、妻を所有したいという典膳の欲望は充分には満たされなかつたはずである。さらに、妻の手記には、苦しい性交渉の際、典膳が

顔を背けながらも行為に及んでいることがつづられており、妻を 道具化 している観は否めない。

しかし、典膳の 処女性 へのこだわりは、単純に 男性 としての典膳の妻に対する 支配欲 のようなものだけを見出すべきではないようにも思われる。結婚生活における日常的な幸福感よりも学究生活における満足感が優先されることを考え合わせれば、妻が処女でなかったことに対する拘りは、典膳が妻に愛されてはいなかったという意識を持っていたために生まれるのではないだろうか。いかに典膳が「非合理的なもの（すなわち感情）の優位をみとめたくない理性的人間」²¹であったとしても、感情 を無にできるわけではない。そして、その点に関しては、妻においても同じであった。自分の存在が、二人の子どもを生み出しただけだという自己認識を手記に綴っている妻の言葉は、典膳の言葉と表裏一体のものに見なしてもいいのではないだろう。典膳と静枝は、互いの満たされ無さを維持しながら夫婦として関わり続けたのである。他者との距離を、他者との関わりを保つことに不得手であった典膳には、妻との関係から満たされることは難しかっただろうし、翻って妻に充足感を与えることも困難だっただろう。その相互の満たされなさを示すように、二人の会話がほぼ典膳からの語りかけと静枝の沈黙もしくは寡黙、自虐的言辞によって成立している。互いを理解し合うことのでき（ない姿がここからうかがえる。さらに、妻が病を患う以前においては、より一層相互理解の困難さが現れている。

「何の用事があるのでもなく寝巻姿で茶を持ってあがってきた」妻に對して、「妻のほつに話しかけることも論理的には可能だった」が、「私の法学に対する誠実さを貫徹するためには、思惟は中断せぬことが望ましい」という判断によって、典膳が妻に声をかけなかったことが記される。そのような自らの態度が問題であったという認識はなく、「哀しげ

な吐息をもらして去った」妻を「可哀そうだと思」うこともあったが、それを「不必要な感情は理性の浪費」と「信じていた」典膳は、妻とのコミュニケーションの回路を持ちえないのである。また、それは、二人で散歩していた場面の回想においても通底しており、「静枝はかならず少し遅れて前かがみについてきた」ために、「単純な嘆声や問い掛けも私が前をむいてそれをするかぎり、彼女の耳許にはとどかなかった」。そのため「大概はおなじ言葉を二、三度繰り返して妻の同意を得」なければならなかった。「夫婦の会話はおおむねお互いの表情とは無縁に交わされた」というのが、常態であったことが示されている。そういう意味では、互いの 感情 を吐露する場面を双方が持ちえないために、「私は妻にとくに愛の感情をいだかなかった」ものの「私にとって、愛の観念は、罪のそれと同様」「避けたほうが賢明な余分の感情にすぎなかった」はずであるのに、「自分の身边にはなく、今後も訪れないだろう欠如の意識として」典膳は「愛の観念」を意識し続けるのである。それを静枝の側から表現すれば、「瀕死人の妻に憐れまれる」「典膳と「相互で憐れみ合いながら」生きる姿が、「わたしたちの触れあう、愛の姿」なのであった。それは、典膳にとっても静枝にとっても苦痛の連続であり、静枝の記すように「地獄」であった。

しかし、もう一度典膳の立場に戻れば、愛の欠如の意識は大きく、結婚後も思いを秘めていた同門の富田に、「静枝が面会にゆくこと自体、私には好ましくないことだったが、嘘を言ってまで出てゆく妻の、その嘘をあばきたてるのが何故か面倒」であり、「私の仕事に関して妻は何も聞かなかったように」「干渉はしなかった」。それは、先述の典膳の妻が処女でなかったことへの拘りと響きあい、自分が妻にとって唯一絶対的な存在として存立し得ないことを自覚させ、愛の不在を強く意識させるものではなかっただろうか。そして、このような人間関係しか築けな

いのは典膳自身にその因を求められたとしても、妻との関わりに温もりを見いだせなかったことには注意が必要だろう。そこで注目すべきは典膳と米山みき、栗谷清子との関係である。

三 女性という他者

米山みきが静枝の生前に正木宅の住み込み家政婦となった当初、「家政婦とはいいいながら、ほとんど家族の一員として正木家に加わったとき」、典膳は「一種のはりあいと喜び」を覚えている。しかしこの感慨は、肉体関係を持つことで、「米山みきの」「肉体を官能の満足のためだけに求めるようになり、「はりあいと喜び」は消失している。さらに、「今」で、許される快楽を貪婪になめつくさねばならぬように、もしいま見送れば機会が永遠に消え去るかのようになり、典膳は米山みきの「肉体」を「荒淫」とも自嘲するほどに求めたのであった。米山みきは典膳の欲望を受け止めてそれに応えるが、次第に「古女房」のようになる米山みきを典膳は「うとましい」と思うようになる。

性交が女の劣位を生み出すというドウォーキンの主張に基づけば、典膳は「性交という女所有によって、女を占領し、支配し、女に対する基本的な優位を表現」できる一方で、米山みきにとって「セックスは、しばしば、「男にしがみつく 私と性交して下さい 手段」となる。このような観点に立てば、米山みきは典膳に搾取される被害者であり、典膳の欲望を一身に引き受け苦痛を与えられる以外に生きえない存在となる。しかし、典膳は、米山みきを「おそらく」「愛していた」と語り、「うとましく」感じても彼女との関係を維持する。ただ、ここでより重要なのは、典膳の「荒淫」が、典膳が栗谷清子に対して「手のとどこかぬ故に、他のなにもにも増して切実な幻影を」覚えたことに起因するこ

とである。言い換えればこのような「荒淫」と表現される典膳と米山みきの関係は、栗谷清子に喚起されたものだったのである。

では、その栗谷清子について、典膳はどのように関わったのであろうか。それは、彼女の動作に自分への「全的な信頼の表現」を見いだし、それを「幻想」と自覚しながらも、「危険な衝動の奴隷になりそうな誘惑」にかられることに象徴的にあらわれている。「休息なき競争意識、優越への意志、常に後を追いかけれ、ちよっと油断するときおとされそうな緊張」をおぼえ続けて学問に打ち込んでいた青年期に、学問以外に意識を向けることができなかつた典膳は、「当然獲てよいはずの栄冠を、その手続きを知らなかつたというだけの手落ちで、取り逃がしたようなくやしさを覚えている。また初めての逢瀬では、「酔いのひとときを、味いつくしもせず、なぜさめねばならないのか。なぜ私はこんなに寒々とさめつづけていなければならぬのか」と自らの想いに没入できないことへの悔いを覚えている。典膳は、自らの感情に従順に従いえず、その表現を知らない。しかしこのような事態は、「法律家は「本来的に相対主義者であり」「窮極において行為者とはなりえない性質をもつ」といつ自らの「me」により必然的なものとされている。その「me」に従いきつておれば、「道義心」に則って米山みきを「後妻にむかえるのが穏当だ」という判断に基づいた行動をとったはずだが、「私はあえてみずからの境界をこえ、無数の不斉合、無数の私見の餌食となるために」「理念の屠殺場である、あの現実」へと向かい、行為（婚約発表）した。そこには、静枝からも米山みきからもたらされることとのなかつた葛藤の存在しえないような「全的な信頼」を向けられる対象として、そして「刑法学者」という「me」以外にも、自らの「存在の絶対性」を保証するものをもたらされるような「me」として自らが求められる可能性が意識されていたと言ってもいいだろう。言い換え

ば、まさに、典膳が絶対的な存在としてその内部に存立する、あるいは絶対的な権力者としてその心を独占しうる対象として、栗谷清子は見なされたといえる。

だからこそ、処女の純潔という「精神性の希求は極度に局限された肉体的な形でしか表現されえない」というように、典膳は、清子に「無意味なまでに清純であることを」望み続け、「抱きあげること、ひき寄せることも」ない。それは、身体を持った人間としての清子のあり方に気づいていないことと同値である。

しかし、このような典膳の処女の純潔への拘りは、その対象となった栗谷清子の側からすれば、完全に受け入れられるものではなかった。典膳が「夢みたいな愛を抱」き、「人形みたいに、ちよつと途惑いながら可愛がられようとしていた」かのように見なされていた清子が、実際は「初恋みたいに熱を上げて」「いたのであつた。清子に対しても「憐愍の情」を覚えていた典膳にとっては、自らが常に主体であり、清子は客体であり続ける。そして、それをある意味清子に典膳は強要していたとも言えるが、清子の側から見れば、それはむしろ反転し、典膳は一個の人間としての清子を見るのではなく、清子に喚起された「幻想」を見続けていたことが露わになるのである。こうして関係を作り上げていく中でお互いの感情を表現し合い確認しあうことがなかったからこそ、二人の関係は成就しないのである。典膳の言うような「幻想」ゆえではなく、「me」に束縛され、論理的ではないという点で自らの感情を表現しえなかった典膳は、自らの感情に浸食され続けていたのである。

このような典膳と清子の関係は、伝記的な側面から見れば、高橋和巳自身の実体験の反映と言えるかもしれない。²⁶しかしそれ以上に、相互の感情表白をいかに理解し行動しうるのかという問題がここに現出してくる。高橋との恋愛について明かした大林素子は、少年期の「白痴」にま

つわる記憶について、「この世の汚辱を一身に受けながら、限りなく無防備に優しい心を他者にふり向けようとした」「白痴」に「典膳から最も遠い一人の救済者のイメージ」を見出し、「白痴に合掌するように愁訴しているのは、典膳であると同時に、鋭敏な知性と、溢れ出る夢想と、過剰な情念のはざまに、引き裂かれ呻吟し続けた高橋さん自身の魂」だとする。²⁷ここから、感情の表白を不要とする関係性への希求を抽出できるだろう。そして、この「白痴」のイメージが提出されるのが、「選択し整理し帰納して、従って それ故に」という繫辞「によって自律してきた典膳が、米山みきと栗谷清子の「無関係に」二つの像を思い浮かべ、しかも、なんの罪の意識もなく、その重複する像を同時に眺め」続け、「倫理的にはなく、論理的に」「破滅」した末のことであることが重要である。

「男は一方で女を極度に賤しめるとともに、一方で女を観念化し、極度に美化」²⁸することを、二人の女性に「肉体」と「精神」に分離した形でそれぞれの役割を付与した故に、典膳の「論理的」な「破滅」は招来される。二人の女性との関係が破綻し、感情の齟齬に曝され続けることで、「白痴」という原像が浮かび上がってくるのである。それは、言語によるコミュニケーションを介させずとも感情が満たされることを典膳が求めているからこそ、沈黙のまま癒すかのように抱きしめてくれた「白痴」を思い出すのである。米山みきと栗谷清子の存在は表裏一体のものであるからこそ、典膳は二人の女性の像を同時に思い浮かべることができたのであり、感情の葛藤が生じえない「白痴」という原像が呼び起こされたのちは、感情の齟齬を起こさざるをえない二人の女性は「わずらわしい」存在でしかないのである。

このように女性をめぐる典膳の手記を見ていくとき、他者への考察が必要となってくる。他者を考えることなしには成立しないだろ

う 意識 を取り上げる現象学を援用した法学を確立しながら、このように他者の 意識 へ思いが至らないのは、意識 を経験的に感得したのではなく、学問として理解したからである。経験主義をここで絶対視するわけではないが、経験の重みに典膳はこれまで気づいてはいなかったのである。このような典膳にとって、他者 とはどのような存在になるのだろうか。

四 他者という存在

「実存者が存在するためには、孤独が必要なのである」²⁹り、「身体を持つ人間の存在は、名指される可能性を受け入れざるを得ない主体として立ち現れるからこそ、孤独と分かちがたいものとなる」³⁰人間にとって、互いの感情を把握しつくすことは不可能である。したがって、「愛の觀念」は次のように「不可能性」としてしか認識されえないのである。

愛は、他者 の存在を享受することであった。しかし、他者 は、自己の把持（志向性）が及びうる宇宙から遠隔化していくことによつてのみ、その固有の存在を主張するのである。（中略）他者（の体験）とは、それを把持しようとする自己の志向性（予期）に対する原理的な不確定性として、すなわち解消できない偶有性として存在するのである。だから、愛は、自らの本源的な欲求を全うしようとすれば、つねに挫折しなくてはならない。³¹

この「挫折」を決定づけられている「愛」は、「他者」との関係性一般に拡大されていくだろう。「他者」との関係性を人間が求めざるをえないのであれば、「他者」とは何かという定義づけも必要になるが、それ以上にすでに現前している「他者」とどのような関係を求めるかが、我々にとっては重要な問題となるはずである。例えば、他者との身体的

な接触によって、根源的に求められるのは「もの」としての他者の身に接触することではな³²く、「他者の存在そのものに触れることである」。しかし、それは「充たされることがない」ものであり、「他者の存在そのものと接触しようとする期待の挫折、あるいは他者の存在そのものへとむけられた志向の幻滅においてこそ、他者が否みがたくあらわれる」³³。「他者」が強固に意識されるのは、自己との懸隔が明らかかな場合であり、その時こそ「他者」は「他者」でありうる。³⁴このような他者のあり方を考えれば、典膳にも 他者 は根源的には「不可能性」「挫折」「幻滅」をもたらささる。だが、そのような事態を乗り越えようとする志向性、あるいは意識せずに近づこうとする志向性は、認められるはずである。だからこそ、典膳の同門であった荻野三郎や富田司に向けられる恩師・宮地経世や静枝の視線は、典膳にとって「欠如」の感覚を覚えさせるものであり、典膳の孤独の相を示すのである。戦時下に富田が検束された際のことを、典膳はこのように回顧する。

わずかの期間に富田の精神の中におこった大転換を、親しい友の はずの私は全然気づいていなかった。無論、個人の秘密な魂の奥底でおこる事件は、友人といえども超えることのできない垣根にはばまれてある。しかし、恩師の姪が専門的知識のかけらもなく、なお手さぐりしようとするのを見て、反射的に、自分が実は親しい友の精神の遍歴・放浪には全く無関心であった冷たい事実を思い知らされた。そして、その苦しい自覚の反面には、一種名状しがたい、他者に関心をもつ魂への羨望と、他者に関心をもたれる存在への嫉妬があつた。

理解しつくしあうことは不可能であっても、その努力だけは為そうとする人間関係を構築する上での必要な技術が、典膳の周囲にはあつた。しかし、典膳は「他者」に関心をもつ魂への羨望と、他者に関心をもたれ

る存在への嫉妬」以前に「親しい友の精神の遍歴・放浪には全く無関心であった冷たい事実」を確認し、自らにそれが欠如していることに気づく。それゆえに、究極的には他者からの眼差しを求めながら、自らが他者への眼差しを欠いていることを問題にすべきなのである。しかし、そのような自己客体化よりも、「愛されて」「いないこと」の自覚とそれによってもたらされる疎外感と孤独は深いものであった。

実力はともかく、弟子たちの中でとくに私が愛されているのではないことは早くから気づいていた。(中略)だが、私の前で富田への度を過ぎた愛着を口走るのは、私の感情を無視した話だった。そして、その時、養父をなだめている静枝の、もはや二人の児の母である妻の類にも涙が流れているのを私は発見した。私の家で、私の目の前で、二人は、なにか私の知らぬ絆で結ばれ合って泣いている。心理的な葛藤になれない私は、無視されたまま卓子の上の花に目をそらせた。だが、私の入場を拒否する別な世界から注意をそらせることはできなかった。ひえびえと冷却してゆく感情の動きを抑えることもできなかった。

また、手記を執筆する現在時に、自殺した荻野の実家に申問に訪れた典膳は、荻野三郎に「先生の姪ごさんをくださるという話」もあつたことを聞かされる。そのことが「初耳」であつたことを述べた上で、典膳は「妻への愛や憎しみも、恩師への敬慕やうとましさも、荻野に対する友情も競争意識も、その存在の無化よりさきに私の胸の中で消えていた」と書き記す。他者に眼差しを向けられなかつた事実は自らにもその因があつたはずだが、それゆえにこそ強く他者に眼差しを向けられることを求め、このように裁断しそれを諦めねばならないのである。だからこそ、典膳の孤独は必然的なものとならざるをえないのである。

生者には「感情」がつきまとう。そのため、「他者」とともに生きね

ばならないのであれば、「感情」を無にすることは不可能である。自らの「感情」も「他者」の「感情」も、非論理的であるという一点において低次のものと見なし続けた典膳に許されるのは、作品の末部にある「さよなら、優しき生者たちよ。私はしよせん、あなたがたとは無縁な存在であつた」という自己認識でしかない。そして、規典の弾効したように「神」を目指し、米山みきが非難したように「権力」を持ち続けようとする典膳は、「他者」に求め続けながら与えられないがゆえに、自己を「絶対」化することでそれを補完しようとしたのである。しかし、埋めようのない孤独感とは、「他者」を希求する志向性へと反転する。そして典膳の満たされ続けられない根源的な因子こそが、あの「感情」という不可解なものだったのである。

感情を書記化することで、整合的な因果関係を示し、その感情を論理的に理解することは可能であろう。しかし、その感情そのものが過ぎ去つたあとにしか、このように感情は理解できない。生じた感情そのものをその瞬間に把握しえないのであれば、感情そのものの理解は不可能であろう。そのため、感情が生じたときに我々の意識は感情の浸食を免れず、感情を理性によつて抑制できたとしても、感情による浸食自体を消滅させることはできない。かりに意識の志向性を変更することで感情が消滅したという錯覚を持ち得たとしても、感情は思わぬ形で噴出するだろう。

さらに、その感情は個人の内部で生起するものであるために、何らかの表現を伴わねば他者に現前することはできない。喜怒哀楽といったカテゴリーによつてある程度の把握が瞬時になされたとしても、その感情の質は言葉を介さなければ自らも理解しえないはずである。そして、他者が自己の感情を理解するために、他者の想像力を頼みにしなければならぬのであれば、完全なる理解などは不可能なはずである。論理は共有可

能であったとしても、感情そのものの共有は不可能である。そのように考えたとき、典膳が目指していたのは、明示されてはいないものの、誰もが了解可能なもの（論理）であり、総体として不可解であり続ける感情は回避すべき禁忌として捉えられていたのである。確かに立石伯も言うように、感情に浸食されたゆえの破滅とも言えるだろうが、自己が理解され得ぬ、あるいは受けいれられぬ孤独感が、ある意味ではいびつとも言い得る知識欲を生み出したのであり、それは単純に論理の優位性の確信のためにだけ行われたのではないのだ。感情という不可解なものを直視してしまえば、その不可解なものとの距離を典膳はとりえなかつたのであり、決して満たされることがないのなら、自分の感情も論理の枠組で解消し、それを他者にまで適応しようとしたのである。その感情への視線、その限界が提示されることによって、典膳は職を解かれた後、はじめて自らの感情と向き合わねばならなかつたのである。むしろ、このことこそが、典膳の「破滅」であり、それを書記化しきつたときに露わになるのが、「悲」の「器」としての典膳の最後の像なのであつた。そこには、満たされぬ感情を抱き続けることを自らの運命として引き受けることが要求されていくのである。

こうして、漱石の『文学論』の分析に示されていたような、感情の重視が和巴自身の作品においても実践されていくことで、正木典膳という一人の人間の全体を描ききつたとも言えよう。長篇志向の戦後派の衣鉢を継ぐ作家として、戦後派を乗り越えていこうとする作家たちの一人として、高橋和巴も新しい戦後派として新しい戦後文学を示していたのである。

注

* 1 「悲の器」は単行本『悲の器』（一九六二年一月二〇日 河出書房新社）によって、完結した形となった。本稿は、この単行本に完全に収録されている『悲の器』を扱う。

* 2 六朝期の文学をはじめ、「陸機の伝記とその文学」（『中国文学報』第11〜12冊 一九五九年一〇月、一九六〇年一〇月）、吉川幸次郎・小川環樹編集校閲「中国詩人選」15『李商隱』（一九五八年八月二〇日 岩波書店）の注釈と解説など、中国文学研究者として活躍し、一九六〇年四月から一九六四年一二月の間、立命館大学でも中国語や文学概論を担当。以降、明治大学、京都大学でも中国文学に関する講義を行っている。

* 3 高橋和巴「逸脱の論理 埴谷雄高論」（『近代文学』一九六一年三、四月号）

* 4 埴谷雄高、福田恆存、野間宏、中村真一郎、寺田透「座談会 新人の文学 「文藝賞」選考経過」（『文藝』一九六二年九月号）

* 5 高橋和巴「捨子物語」（一九五八年六月一〇日 足立書房、改訂版一九六八年三月五日、河出書房新社）

* 6 『悲の器』の先行研究を概観すると、『悲の器』は正木典膳が刑法学の権威であり、大学教授・法学部長といった属性を付与されているために、「座談会 新人の文学 「文藝賞」選考経過」以降、知識人の問題を指摘されることが多い。河野仁昭「知識人告発の文学 『悲の器』について」（小川和佑編『高橋和巴研究』一九七六年七月一〇日 教育出版センター）がその顕著な例であり、その中で河野は高橋が「かなり戯画化された正木典膳と、程度の差はあれおなじ錯覚、おなじ思い上り、おなじ非人間行為を犯している」という「問題を抱えた存在であることを自らに向って問おうとしない知識人を、告発するために『悲の器』を書いたのである」と断じている。このような知識人に焦点を当てた見解は、文学事典などにも通底しているものである。

* 7 論理性を重んじていた正木典膳の内的論理の破綻が、「愛」や「感情」によってもたらされたとする論考も見られる。代表的なものとして、

- 真継伸彦「全体小説への意志 『悲の器』論」(『人間として』第六号 一九七一年六月三〇日)や伊藤益「汝の非在」(『高橋和巳作品研究 自己否定の思想』二〇〇二年一月二五日 北樹出版)がある。
- * 8 「夏目漱石における近代」(『中央公論』一九六五年一〇月号発表の「夏目漱石と近代文学の確立」と、桑原武夫編『日本の名著 近代の思想』(一九六二年十一月一五日 中央公論社)所収の「夏目漱石『文学論』を合わせて再構成したもの。初収は「孤立無援の思想」、引用は『高橋和巳全集』第十三巻一九七八年四月十五日 河出書房新社)
- * 9 ルック・チオンピ『感情論理』(松本雅彦・井上有史・菅原圭悟共訳 一九九四年六月二〇日 学樹書院)
- * 10 中村雄二郎『感性の覚醒』(一九七五年五月三〇日 岩波書店)
- * 11 前掲の「座談会 新人の文学 文藝賞 長編 選考経過」において、埴谷雄高が高橋和巳を「戦後文学の影響を最も正当に受け」、野間宏のような「全体小説の志向」をもった作家だと評している。その野間宏は「私は時代と社会の全体をとらえ、その全体のただなかに人物(人間)の全体を置くことを、作家として何より重要と考えているわけである」(『長篇の時代』)『群像』一九六八年四月)と述べるように、あらゆる観点から一個の人間を描こうとし、『青年の環』などの長編を執筆している。こういった戦後文学における先行者からの影響を考えると、高橋が思想に重きを置いていたとしても、長編志向であり、全体性を求めていた高橋の描く作品は感情を考察しなければ把握しきれないと考えられる。
- * 12 前掲の河野仁昭や伊藤益は、知識に偏重した「畸形」として典膳を捕らえうると指摘し、知性や理性に偏重する志向性に強い違和感を示している。
- * 13 G・H・ミード『精神・自我・社会』(稲葉三千男・滝沢正樹・中野収共訳 一九七三年二月一五日 青木書店)
- * 14 橋正典「高橋和巳小論」(初出時原題「我が心は石にあらず」論『対話』第八号 一九七二年一月号、引用 埴谷雄高編『高橋和巳論』一九七二年五月三日 河出書房新社)、中山和子「高橋和巳論」(小川和佑編『高橋和巳研究』一九七六年七月一〇日 教育出版センター)
- など、高橋和巳の作品における女性への差別的な視線を批判している研究もあり、首肯すべき点が多くある。高橋自身は、「戦後文学の思想」(『高橋和巳編集・解説「戦後日本思想大系」13「戦後文学の思想」一九六九年二月一五日 筑摩書房)において、武田泰淳の「女について」に関して「男女の性的連繋は、単に官能の問題や一般的な親和力の問題ではなく、無限に自己自身をひらいてゆく実存的関係として把握されている」と述べ、武田泰淳と同じ問題意識を共有しているように見えるが、それが十分に作品に生かされたとは言いがたい。高知聰は「墮天使たちの狂宴 高橋和巳の作品世界」(高知聰ほか『高橋和巳をどうとらえるか』一九七二年五月二五日 芳賀書店)で、作品あるいは作家の欠陥を指摘するために女性の描写を取り上げているが、虐げられている女性を描くこと「女性差別という単純化した見方に対しては一考の余地があるはずである。
- * 15 病に伏している妻がありながら、身近にいる女性と関係を主人公がもつという作品の構成は、『墮落』(初出『文芸』一九六五年六月号 初刊一九六九年二月二五日 河出書房新社)においても用いられている。高橋和巳の『墮落』については、『高橋和巳』『墮落』論 混血と捨子 をめぐって」(『論究日本文学』第七三号 二〇〇〇年二月一五日 立命館大学日本文学会)を参照いただきたい。
- * 16 寺田透「九年ぶり悲の器」(『高橋和巳作品集』2 一九七一年一月 河出書房新社)
- * 17 伊藤益「汝の非在」(『高橋和巳作品研究 自己否定の思想』二〇〇二年一月二五日 北樹出版)
- * 18 ヨコタ村上孝之『性のプロトコル 欲望はどこからくるのか』(一九七七年一月二八日 新曜社)こういった「処女性」に関する言及として、村上信彦『女について 反女性論的考察』(一九四七年二月 興風館、新装版一九七一年六月 理論社、一九七九年四月二〇日 こぶし書房)における「財産」としての「処女性」に関する言及も参照されたい。
- * 19 三枝和子『恋愛小説の陥穽』(一九九一年一月三一日 青土社)
- * 20 村上信彦前掲書

- * 21 真継伸彦「全体小説への意志 『悲の器』論」(『人間として』第六号 一九七一年六月三〇日)
- * 22 アンドレア・ドウォーキン『インターコース 性的行為の政治学』(寺沢みつほ訳 新版 一九九八年五月一日 青土社)
- * 23 アンドレア・ドウォーキン前掲書
- * 24 ヨコタ村上孝之前掲書
- * 25 竹村和子は「愛について」(初出『思想』八八六号 一九九八年四月、引用 『愛について アイデンティティと欲望の政治学』 二〇〇二年一〇月一八日 岩波書店)において、「愛の場面において」「わたしとあなたはいつもどこかで行き違い、わたしはわたし自身の愛に裏切られ、わたしはあなたの愛に戸惑い、わたしはわたしからもあなたからも愛からものはぐれながら、それでもわたしとあなたは愛し合う(と信じて、愛し合う)、それが愛の経験」だろうと、相互の「愛」の不可能性を述べている。愛し合っていることを確認し合った二人であつてもこのようであるなら、相互の自己表白が不十分な二人にはこれ以上の懸隔があつてもおかしくはない。
- * 26 大林律子『悲の器』執筆のころの高橋和巳と私(小松左京編『高橋和巳とその時代』 一九九一年六月三〇日 阿部出版)
- * 27 大林律子前掲論
- * 28 村上信彦前掲書
- * 29 エマニユエル・レヴィナス『時間と他者』(原田佳彦訳 一九八六年一月三〇日 法政大学出版局)
- * 30 大澤真幸「孤独・性愛・信仰」(初出『NUDE』 一九八九年六月朝日新聞社、引用・増補新版『性愛と資本主義』 二〇〇四年一〇月一二日 青土社)
- * 31 大澤真幸「貨幣の可能性と愛の不可能性」(初出『現代思想』一九九五年九月、引用・大澤真幸前掲書)、竹村和子前掲書においても同様のことが述べられている。
- * 32 熊野純彦「他性の諸相」(初出時原題「理性とその他者 理性の外部をめぐる思考のために」 新田義弘ほか編集 講座「現代思想」14『近代／反近代』 一九九四年四月二一日 岩波書店 引用『差異

と隔たり 他なるものへの倫理』 二〇〇三年一〇月一六日 岩波書店)

* 33 熊野純彦前掲書

* 34 高橋たか子が「かわいそうな人だいつも思ったこと」(『群像』一九七一年七月号)や川西政明が『評伝高橋和巳』(一九八一年一〇月二〇日 講談社)で示したような、ある意味相互理解した上で相互認知できる「他者」よりも、相互の理解が充分には成立しない存在こそが当に「他者」たりうるべきだろう。

* 35 立石伯『高橋和巳の世界』(一九七二年四月四日 講談社)

付記 本稿は、二〇〇五年九月一〇日に行なわれた立命館大学日本文学会談話会での発表原稿を基にしている。当日参加頂いた中西健治先生、外村彰先生を始め、ご助言下さいました方々に篤く御礼申し上げます。

(啓明学院中学校・高等学校専任教諭)